

平成 24 年度 京都文化芸術都市創生計画推進フォーラム・文化ボランティアのつどい 記録

日時：平成 25 年 3 月 20 日（水・祝）午後 1 時～2 時 40 分

場所：宮川町歌舞練場

- 1 狂言「三番三」
- 2 パネル・ディスカッション
- 3 一調一管「獅子」

<パネル・ディスカッション記録>

司会 本日は、文化芸術都市・京都の創生というテーマで 1 時間程、京都の過去・現在・未来に思いを馳せながら、このまちがどのように文化を継承し、今後も新たに創造していくのかということ、それぞれのお立場からお話をいただきたいと思っております。

まず出演者の御紹介ですが、大蔵流狂言師の茂山逸平さんです。先程、三番三を御披露いただきました。京都を代表する狂言のお家にお生まれになり、伝統を脈々と受け継いでおられます。落語など他のジャンルともお仕事をなさっています。この 3 月にはヨーロッパでの公演もなさいました。平成 22 年度の京都市芸術新人賞を御受賞になっています。

続きまして、能囃子幸流小鼓の曾和尚靖さんです。曾和さんは代々小鼓の奏者を輩出するお家にお生まれになり、伝統をしっかりと受け継ぎながら、現代的な感覚で小鼓を楽しめるような様々な取組をなさっています。平成 21 年度の京都市芸術新人賞を受賞されています。

次に、京都市美術館館長の潮江宏三さんです。京都市立芸術大学で、西洋美術史の教員として長く教鞭を執られ、平成 19 年から 22 年まで学長をお務めになりました。平成 23 年からは京都市美術館で館長としてお務めいただいております。

また、潮江館長には、京都文化芸術都市創生計画の評価を行っていただきます、京都文化芸術都市創生審議会の副会長としても御参画いただいております。

それではここからの進行は室長の奥に任せたいと思います。よろしく願いいたします。

奥 文化芸術都市推進室長の奥でございます。ここから、私が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、京都文化芸術都市・京都の創生ということ絡めながら、御自身の御活動を簡単に御紹介いただければと思います。

まず、先程も紹介がありましたが、茂山さんは狂言師として御活躍のことはもちろんですが、NHK 朝の連続ドラマでも御活躍になっておられ、非常に親しみを感じております。茂山さんは若手による「HANAGATA」ですとか、新鮮な感覚での公演も企画なさっていますが、更に落語や邦舞など、少し違うジャンルの芸能とも御一緒に公演をなさっていますね。京都市の関係で言いますと京都創生座の第 6 回公演にも御参加いただいて、非常に斬新な狂言を御披露いただきました。こうした狂言という枠組みを超えるような事例も含め、御活動の様子を御紹介いただけますでしょうか。

茂山 狂言は、能楽と呼ばれるジャンルの中の一つですが、わりと何でも屋さんなんですね。例えば、「道成寺」と呼ばれる大曲があるのですが、鐘を持って運ぶのは、何故か狂言師だったりします。先程舞わせていただきました「三番三」は「翁」という曲の中の一つなのですが、その面を持って出るのが何故か狂言師なんです。ジャンルとしては能楽ですが、わりと何でも屋さんとして動く場合が多いですね。それを現代に置き換えて少し変わった活動をしています。

能楽というと、皆さん、しゃちほこばった、堅苦しいものと思われる方が多いと思うのですが、実際、分からないということも多いのです。難しいんです。元々、日本人が日本人のために作ったエンターテインメントですから、日本人なら分かるはずなんですけども、残念ながら、現在の社会の中では特殊なものとして考えられています。なるべく特殊なものと感じ取っていただかないような窓口作りをしたいなあと思って、落語の方とやってみたり、舞踊の方と一緒にやってみたり、一緒にすることで少しお客さんの見方が変わるんじゃないかということで活動しています。

…これは誰に向けて喋ればいいんですかね。お客さんに向けてでいいんですよね？（会場笑）
まあ、何でも屋さんとして活動しているという御報告でございます。

奥 ありがとうございます。茂山さん、何でも屋さんとして御活躍とのことでした。笑いというのは、苦しみを笑い飛ばすということで、素敵なことだと思います。

潮江先生、何か御質問などありますか。

潮江 急に振られまして、動揺しておりますが。

御自身の中でも現代に生きている感覚と、古典芸能の中の感覚と、ギャップみたいなものがあるのでしょうか。そこはエイヤツと乗り越えておられるのでしょうか。

茂山 それはもちろんありますね。親父や爺さんに習った狂言だけをしている方が楽だという感覚はあります。楽しいですし、苦しみも少ないです。噛み砕くということ適切ではないかも知れませんが、やはりガイドを付けないと、現代では分かっていただけない。

昔の方は、おそらく、源氏物語でも平家物語でも、筋くらいはざっと御存じだったと思うんですね。今の中高生は、多分、勉強でしか目にしないということが多くなっていると思いますので、そういう部分をかみ砕いてあげないといけないと思います。

潮江 そうですね。古典文学を当たり前を読むということがなくなってきていますね。

茂山 会場に、源氏物語を読破したという方はおられますか。寂聴版でも、何版でも構わないのですが。読み切ったぞという方。…やはり少ないですね。

奥 次に曾和さんです。曾和さんも伝統を受け継いでおられますが、現代の若い方にも小鼓を楽しんでいただけるよう、様々な取組をなさっていると伺っています。

創生計画には「伝統を受け継ぐ」という項目がございますが、本日お越しのお客様の中には、普段の生活の中で能楽のような伝統文化になかなか馴染みのない方もおられると思います。どのようにして、現代の社会の中で広げていく御活動をなさっているのか、具体的な事例も含めて御紹介いただけますか。

曾和 ただ今御紹介に与りました、“こつづみ”の曾和でございます。

“こつづみ”ではございません。何遍か突っ込もうと思ったのですが。（会場笑）

私は逸平さんとは違いまして、完全なる専門職です。僕は鼓しか打ちません。しかも能楽というジャンルの、お能と狂言を普段打っているわけです。ここは宮川町歌舞練場ですが、この舞台に立つということ自体が、普段はありません。京都に住んでいながら、ある意味、ここはアウェイなのです。

能楽堂専門ですので、能を囃すという立場でものを考えます。小鼓という楽器を持っていますので、それを純粹の日本の楽器として音を聴いてもらって、聴いてもらうことで、耳か

ら小鼓を普及していく。それから、学校で習わないからやと思いますが、皆さん持ち方も知らない。そういうところを、持っていただいて、少し打っていただいて、第一歩を踏んでもらうということをしています。

いかがでしょうか。

奥 “こつづみ”ですね。失礼しました。
今のお話について、茂山さんいかがでしょう。

茂山 えっ、僕ですか。
まあ、同業者ですからこないだも一緒に能楽堂に行きましたし、実は又従兄弟なんで、特に質問はありません。

奥 あ、そうなんですか。初めて知りました。

潮江 私は四国の香川の出身です。喜寿になる姉がおりますが、その世代が子どもの頃の写真を
見ますと、日舞をやったり、鼓が横に写っていたり、そういう育ち方をしていますね。

それがいつの間になくなったので、今仰ったような活動は必要ですね。

僕はいつも聴いていて思うのですが、日本人の標準的なリズムの中から出てくるものを打ち変えて、音を出しているような感じがします。そういう感覚がいつの間にか忘れられているようで非常に残念です。先程の舞を見ても自然にリズムが湧いてくるようでした。聴こうという構えがなくても私たち日本人にはずっと入ってくるというか、そういうものを伝えるのはとても大事だと思ってお伺いしました。

奥 ありがとうございます。

次に潮江館長にお願いしたいと思います。館長は、現在、京都市美術館のトップとして御活躍ですが、その前は教育者という立場で後進の育成に当たってこられました。御専門は美術史ということですが、芸術大学の学長もお務めでしたので、クラシックや、日本の伝統音楽等にも幅広く関わってこられました。京都の未来の文化芸術を担う方を多く育ててこられたお立場で、伝統を脈々と受け継ぎ、新しいものを生み出してこられました。

御紹介を含め、一言お願いいたします。

潮江 京都芸大に38年おりましたので、色々な世代のアーティストとお付き合いをしまりました。時代の変化も経験してまいりました。

1960年代、70年代はいけいけどんどんという感じで、芸術もそうでしたが、何か新しいことをやれば誰かが評価してくれる、世間でも認められるという状態でした。ヨーロッパにも新しい芸術の気質というものがあったって、自分たちで未来を切り開けるという感覚がありました。今はもうそういうものはありませんので、どこを基点にするか、ということが問題になります。創生計画で言いますと、京都が将来的にはそのような拠点になればよいと思います。

もう一つ、人口が減少して若い人が減っていますので、伝統を受け継ぐという人達も少なくなるということがあります。美術を志す人たちも減ってしまっています。その中で、伝統を絶やささないように、いかに上手に育てていくかということが大学の課題ではないかと思えます。なかなかうまくいかないこともあります。

そのような中でも、今、京都の芸術家は高い評価を得ています。個展を開けば作品は全部売れてしまうということが結構あって、名前の知られている人では、名和晃平ですとか、や

なぎみわとか、世界的に活躍している方がたくさんいます。彼らがまだ皆京都に住んでいる。そういうことを基点にして、現代芸術の世界も動いているんじゃないかと思います。

先程少し話に出ました日本の伝統音楽についても、申し上げます。私は、学長を務めましたし、それ以前も大学の基本的な計画を作る会議に盛んに関わっておりましたが、その際に、日本伝統音楽研究センターについて議論になりました。伝統音楽研究センターは、2000年、西島学長の時に作られたものですが、これはあくまで研究施設でした。その後の色々な経過を見ながら、若い世代をどうやって育てるかが大事なんじゃないか、それは実際に演じられる方だけではなくて、仲介者としての役割を持つ研究者をどうやって育てるかも重要だということになりました。当時は、既に研究経歴がある方に大学に来ていただいて研究をしてもらうというスタイルでしたが、そうではなくて、自分たちで若手を育てられる組織にしなければという議論をしまして、ようやく今年の4月に日本の伝統音楽を研究する大学院というのできるようになりました。そういう人達が伝統音楽をサポートすることになればよいと喜んでるところです。将来的には、演奏家も、その大学院で少し理論を学んだり、そういうこともできればよいと思っています。

今、美術館の館長という立場では、しばらく美術館でできていない若手を育てるための展覧会のことや、工芸をきちんと扱うことを、担当者と話しております。

奥 芸大で伝統音楽研究センターを立ち上げられたというお話をいただきました。

狂言の茂山さん、小鼓の曾和さん、美術の潮江館長、様々に各分野で御活躍の皆様で、共通点は何だろうと思われる方もおられるかも知れませんが、今回のパネル・ディスカッションでは「受け継ぐ」ということをテーマにしたいと思っておりまして、そこが共通点になっております。

茂山さんも曾和さんも、長い歴史の中で伝統を受け継ぎながら現在の社会と向き合い、暮らしの中にそれぞれの芸を広げていっておられると思います。

潮江館長も、美術史という、これも非常に深い射程を持ったお仕事をなさっています。若手を育てるということをやってきましたし、美術館の館長として美術品を受け継ぎながら、やはり人を育てるということをやっています。先程も少し触れられましたが、来年度将来構想を策定するというようになっておりますが、美術館をどのようになさろうとされているか、一言、お願いできますか。

潮江 京都市美術館は1933年に建てられ、この秋に創設80年になります。日本で2番目に古い公立美術館です。東京都立美術館の建物は当初のものはございませんので、建物としては1番古いということになります。誇らしくはありますが、古いですので、物理的にも環境的にも不十分なところがあります。そういうところは当然整備をしなければなりません。

美術館自体は、これまでの歴史を振り返りますと、昭和初期の作品を含め、錚々たる収蔵品があります。そういうものは本当に一級品ですが、ただ、大半はその当時の一番新しい表現だったのです。それが大事なことで、今、頑張っている世代の人たちを助ける役割が美術館にはあります。作家の活動を後ろから支えてきたというのが美術館なのです。ただここ20年くらいの美術館の活動を私自身外から見えてきて、その機能がうまく果たせていない、ということを感じております。

今回、リニューアルの計画を立て、そういう機能を復活させて、しっかりと若い作家を育てていく美術館にしたいと思っております。

見に来ていただいた方、どんな世代の方でも喜んでいただけるよう、伝統音楽も含め、先端のアートとジョイントして楽しめる場にできるとよいなと思っています。

奥 パネリストの皆様の活動について御紹介いただきました。

少し話を展開いたしますが、現在の京都を見回しますと、日本全体がそうですが、まだまだ外に開く余地があると思います。本日も会場には京都市文化功労者の皆様や、京都で文化芸術に関わっておられる方が多くお越しですが、これを拝見するだけでも非常に豊かな文化が京都にはあると感じられます。ただ、それが意外と知られていません。海外でも、「京都」の名前は知られていますが、ここにあるものをよく知っているという方は意外とおられないように思います。

創生計画の重要施策の中に「国内外との文化芸術交流による質の高いコミュニケーションの促進」というものがございます。バイリンガルの英語の冊子を配布するとか、世界の第一線で活躍する芸術家の招聘ということが書いてございます。

茂山さんもフランスに留学なさって、海外でも公演なさっているとお聞きしていますが、世界に発信していく中で何か課題がありますでしょうか。工夫をされていることなど教えていただければと思います。

茂山 そうですね…。

狂言は言葉が分からないと分からないお芝居で、海外でするにはまずそこからなんです。いくら面白いことを言っているつもりでも、それを理解していただかないと笑っていただけません。

舞台構造も向こうに行くと違います。字幕を出そうにもうまくいかないこともあります。ヨーロッパの、例えばオペラをなさるような劇場でさせていただきますと、非常に舞台の天井が高いんですね。お客さんが上の方にある字幕を御覧になると、役者が見えないということがあります。困ることだらけなんです。

狂言は海外公演がわりと多いんですが、非常に海外に不向きなお芝居だと思います。それだったら能を持って行った方がよい。同じ分からないなら、心地よいものを持って行った方がいいんじゃないかと僕は思います。ただ、能を持っていこうとすると、人数が多いですから。狂言だと4、5人で済む。お手軽だということで海外公演が多いんだと思います。

我が家の狂言師たちは、海外に行くと、無駄なことをしないというのを心がけています。茂山千五郎家の役者は、舞台の上から、すぐお客さんの笑いを拾うということをするんですね。笑っていただかないと舞台上に存在する価値がないと思っている者の集まりなので、舞台の上で色々いらんことをするんです。海外に行くと極力そういうことをしない。それが鉄則です。元々メリハリの付いた大袈裟な動きをしますんで、それにただひたすら集中する。あとは視線をぶらさない。これが海外での工夫です。

それから日本でやる時とは、言葉の音程を変えるというのもあります。言葉が分からないなら、音で笑ってもらおうと。YESの時はYESの音を出す、NOの時はNOの音を出す。幼稚な工夫ではありますが、分かっていただけの範囲も広がると思います。いかがでしょうか。

奥 大変な御苦勞をなさって…。

茂山 だって日本語が分からないですからね。

奥 会場の皆様もお話を聞きながら、YESの音というのをどうやってなさるのか気になられたと思います。

茂山 「かしこまってござる」と言う時、YESという時は高く言うんですね。NOと言う時は低目に。分かりますか。人間、「いいよ」と言う時は高く言いますが「駄目です」という時は低い

声になりますね。逆には言わない。音の出し方として。

奥 非常によく分かりました。

私、てっきりフランスに留学されていたので、フランス語で喋られるのかなと思っていたんですが。

茂山 無理！

狂言でははっきり大きな声で全部の文字を言うんです。彼奴らは全部の文字を言わないので。元々無理。英語も辛そうですね。僕の従兄弟がやっていますが、大分難しそうです。チェコ人は大丈夫です。

奥 チェコ人…？

茂山 チェコ人はチェコ語で狂言をしていますので、何となく狂言っぽい言い方をします。何を言っているかは分かりませんが。

奥 今日は、フランス語で何か言っていただけるのかと思っていたんですが。

茂山 まさか。1年では喋れるようになりません。残念でした。(会場笑)

奥 ありがとうございます。

また話を展開いたします。京都の未来について考えるときに、人を育てるということも重要です。創生計画の中には「文化芸術に親しみ、その楽しさを知る子どもたちの育成」ということで、これが重要施策に位置付けられています。

曾和さんは全国 100 人ものお弟子さんを教えておられるとお聞きしています。大人の方が多いのでしょうか。子どもさんや若い方もおられるのでしょうか。

曾和 大人の方から子どもさんまで色々な方がおられます。マンツーマンでお稽古させていただきますし、結構、一人ずつに丁寧に教えることを心がけていまして、団体でということは基本的にはいたしません。

あっちゃこっちゃ、遠方にもまいらせていただきます、と自分から申し上げています。理由は一つです。僕が京都を全国に持って行きたいからです。例えば札幌とか東京とか、京都の先生が行って何が出来るか、京都らしい言葉を話すとか、京都らしい所作をすとか、全国にいる弟子に京都を感じてもらおう。僕のホームグラウンドの京都に舞台を見に行きたいなと思われるように、ちょっとずつお話をしながら、お稽古しています。

奥 ありがとうございます。

京都に来て本物を見たいと思ってもらえるよう、全国のお弟子さんに京都を広めていただいているということでした。

伝統の継承には、子どもたちが普段の生活の中で身近に触れる機会が必要だろうと思うんですが、その辺、何かありますか。

曾和 そうですね。

学校教育でしなければ駄目だということが簡単に言われますけども、そういうことは基本的にはなかなか進まないんです。そうではなくて、僕は、小中学校の先生が、こういう世界

があるということをまず知っていただくのが早いと思います。

子どもたちに、はい構えなさい、と言ってもなかなか。僕は子どもたちに小鼓を触らせてあげて、その場を楽しくすることはできますが、先生たちがその楽しさを知らない、どうしようもありません。

小鼓は打楽器ですから、触れば音が出ます。そういう根本的な楽しさがありますが、それだけでなく、きちっと教えてもらうことで本当に楽しくなる。例えば鼓を打つまでのプロセスを習う。鼓を持った時はこういう格好で持たないかん、とか。そういうかちつとしたことをきちっと教えてあげるといことが、僕は今一番大事やと思います。鼓だけじゃなくて、舞台でも一緒。

マナーを守らない大人なんてのも山盛りいますから、きっちりものを変えていって、京都らしいということ、受け継ぐということを見直して、そこからものをしてほしいと思います。

奥 ありがとうございます。

かちつとしたことをきちっと。すごく分かりやすい言葉です。

曾和 そうです。もっとビシツとしたことをバシツと。(会場笑)

奥 曾和さんは、昨年明倫茶会で席主をしていただいて、鼓尽くしのお茶会をしていただきました。それが大変印象に残っています。

曾和 応募が多くて、入れなかった方は大変残念やっと思います。

自分は演奏するばかりでなく、いつも鼓を打つまでのプロセスを考えています。例えば今日は曇り空やから湿気があるとか、起きた時に顔の肌が今日は乾燥して突っ張ってるとか、そういうことも考えます。お客さんが多いと室温がちょっと高いとか。鼓の皮は潤いが要りますので。そういう想い、鼓を打つまでのプロセスを、茶会でも、鼓を触ってもらえなくても、感じてもらえないかなと思ったのです。

鼓のことを考えています、と言ってもなかなか分からないでしょうし、僕はプレイヤーなので、話すよりも、鼓の音色で皆さんの気分を高揚させるようなこと、囃し立てるといことを通して、何かを感じてもらえればと思っています。

奥 鼓の音色は気分を高揚させる。先程も聴かせていただいて、本当にそう思いました。

今日は京都の過去・現在・未来を少しでも感じていただけるよう趣向を凝らしております。開会前に会場で流しておりました 100 年前の祇園囃子など、もちろん古い音源ですのでクリアではございませんが、案外、現在と変わらないように感じるどころもございました。

茂山さんも、おじいさまたちと一緒に舞台に立っておられますが、昔と今で共通するところも多いのかと思います。過去・現在・未来という流れの中で、何かあればお願いします。

茂山 僕はまだそんなに古くないので、どうか分からないんですけども、何が違うかと言うと、スピードが違いますね。恐らく、僕が舞台に出だした頃と比べると、30分の狂言やと、ひょっとすると3分くらい早くなっているかも知れません。そういう気がします。

そんな気がしません？

曾和 します。

茂山 間(ま)というのもそうですけど、お客さんとのリズムも含め早くなっています。

あとは何が違いますかね…。

親父が年取ったとか。僕が大人になった。もう甥っ子が舞台に立っていますし。これが一番分かりやすい、過去と現在と未来です。

お客さんの層というのも大分違うと思います。能の会に行くと、ちゃんと舞台を見ているお客さんが増えました。昔は皆下を向いていた。先生の会に行くと、皆下を向いて謡本というのを見ていたと思います。謡ってはる最中に。関係のない本じゃないですよ、その演目の本を見ているんです。そういう人は少なくなってきたと思いますね。

奥 舞台を見られる。

茂山 そうですね。昔は謡を習っておられる方の割合が多かったと思いますが、今は楽しみとして見に来られる方が増えたんじゃないかと思います。

奥 曾和さん、30分が3分程早くなるとすると、囃子方も早くなっているということですよ。

曾和 そうですね。実際早くなっていると思います。

基本的に能の世界は8拍子でできていますけども、その拍子の体感時間が短く感じるんだと思います。8のリズムが、いち、に、に、に、京都は皆そう言いますよね。お風呂入る時でも。それが、いち、に、さん、になっている。お風呂での口伝みたいなもの、体感時間が変わってるんだと思います。

あとは辛抱ができない。じっとしているのが辛い。携帯電話でも、連絡したらつながるやろうと皆思っています。電話したのに何で取らへんのや、と。うちの親父もいまどこにいのや、と言うてきますけど、どこでも結構。家に電話をかけるということも、お手紙も、一服間を置いていたのが、ダイレクトに変わってきた。世界も小さくなって、待ったり、ゆっくりしたりする時間がなくなっていると思います。それで能が見られないのだと思いますね。

奥 すごく深い話になってきました。潮江先生、茂山さん、曾和さんのお話を聞かれて、いかがですか。

潮江 今のお話聞いていると、世知辛くなっているというか、時間が短くなっているというのはすごく興味深いですね。人間の体感時間、生理的な時間というのが短くなっているということですよ。携帯電話のお話もありましたが、確かにそういうことがあります。

大学でも、昔は、もう少し考えようという教え方がされていましたが、そういうのがなくなっている。

機械のシステムでコントロールされるのはあまりよくないですね。先程も申し上げたように、人間の中のリズムから出てきているのを大事にするべきです。まあ、それも時代によって変わるでしょうが。

日本の文化は京都で生まれてきたと思います。神坂雪華という画家でありデザイナーであった作家の展覧会が全国を巡回していて、その図録にも書かせていただいたのですが、美術や能や狂言、言葉や視覚文化もそうですが、そういうもの全部で日本の文化ができあがっていることを、自分がこういう仕事をしていて、改めて認識します。

友禅なども、日本文化がどれだけヨーロッパを驚かせたか、という話をすると「先生そんなの知りませんでした。ヨーロッパの真似をせなあかんとおっしゃっていました」と職人さんが仰る。そういうところも伝えていくのは私たちの役目だと思います。

お二人も典型的な京都の文化を伝える役目をなさっています。私は西洋文化との比較で、日本のことを話してきたと思います。こういうことが若い方にも浸透していくことが大事だろうと思います。

リズムが変わっているという具体的な御指摘がありました。1980年くらいからでしょうか、情報社会と言うことが言われるようになって、その中で伝統文化を守ることは本当に大変なんだなと思います。お二人は頼もしい限りだと思いますね。

奥 本日は文化ボランティアのつどいも兼ねております。会場にたくさんの文化ボランティアの方にお越しいただいています。

皆さん、文化ボランティアのことは御存知でしょうか。文化芸術活動をサポートしていただける方を募集し、一方で、文化芸術活動でサポートを必要としておられる方の情報を集め、お互いに結び付けるとい制度です。京都市では通算で800名程の方に御登録いただき、様々な形で御活躍いただいています。本日のフォーラムの受付や運営のお手伝いもいただいています。本日お配りした資料の中に「文化ボランティア・きょうと」というリーフレットも入れていますので、是非御覧ください。

茂山さんも曾和さんも、御自身で公演をなさることがおありかと思いますが、この制度のことを御存知でしたか。

茂山 知りませんでした。

曾和 ちょっと宣伝です。今日、チラシが入っていますが、今度おじいちゃんのお誕生会というのをさせていただきます。私が主催するのですが、おじいちゃんを見に来てもらおう、鼓を聴くだけじゃなくて、その姿を見に来てもらおうと。

今、ふと思い出したんですが、案外、僕らのおじいちゃんたちは“いらち”なんです。いらちというのは、せっかちのことです。教えるときは、やいやいやい！と教えられて、後でほんまはもうちょっとゆっくりするんや、と言われてたり。本番が終わって、もうちょっとたっぷりせなあかん、とか。そういう感じですよ。

茂山 そうですね。うちも、呪文のように、ゆっくり大きな声でおもしろうやってこい、と言われるます。

曾和 今日のは長いとか、今日のは早いとか、舞台のあとに言われます。

おじいちゃんは、鼓を打ったらさっさと帰ってしまいますが、それを追いかけて帰る。そういう姿を見て、こういうことをしたはったなと覚えておく、というのを受け継ぐということやと思います。

息遣いを見る、現場で聴く。教えてもらうばかりではなくて、知らんうちに空気感を体で吸収していつてるんじゃないかな。

茂山 吸収してますね。長いこといありますからね。

曾和 長いこといますね。2人ともおじいちゃんは長生きですからね。

茂山 まだいますね。

曾和 逸平ちゃんのおじいさんと、僕のおばあさんが兄妹なんです。

親戚感というか、今日はえらい御立腹やなどか、何でもかんでもしれっとしてるんじゃないかと、朝から持ってくる空気みたいなのもあったりして、そこも京都らしいですね。話が飛んでしもた。(会場笑)

茂山 そのお誕生会にボランティアさんに手伝いに来てもらいたいということですよ。

曾和 ちょっと今考えてます。

茂山 文化ボランティアというのは頼めば来てくださる？

奥 はい。京都市の文化芸術企画課にお問い合わせいただければと思います。

曾和 それは演奏のある当日だけなんですか。京都駅前でチラシを撒いてくれはるとかもお願いできるんですか。

茂山 お誕生会するから来てください、って駅前でやってたら、びっくりしはるかも知れませんね。

曾和 うちのおじいちゃん人間国宝やし。

茂山 天然記念物みたいなもんです。

奥 会場の文化ボランティアの皆様も、これからまたお声掛けさせていただきますので、よろしくお祈りします。

先程、人間国宝のおじい様達、空気のような存在ということで…。

曾和 空気ではないですね。(会場笑)

奥 おじいさまたちが長生きされて京都の伝統を引っ張っておられるということで、茂山さんも長生きされる家系ですから、未来に向けて…。

茂山 未来に向けて、健康に気を付けます。(会場笑)

奥 是非、引っ張っていただきたいです。

茂山 頑張ります。

奥 潮江先生、最後に何かあれば。

潮江 私がややこしいことを言っても何ですので、余韻をお楽しみいただければと思いますが、文化ボランティアの皆さんに一言だけ。京都の文化というのは、これがなくなったら京都でなくなるというようなものです。そういうお仕事だと思って、是非、お励みいただければと思います。

奥 ありがとうございます。

余韻を残してという先生のお言葉にも拘わらず申し上げます。

創生計画には市民の皆さんが文化芸術を楽しみ、創造し、支援するものとしてまさに主人公であるということが書かれています。京都には1200年の歴史があり、多くの方が有形無形の文化を背負って、文化芸術に関わっておられます。こういう仕事をしておりますと、市民の皆様の言い知れぬ底力のようなものを感じることがございます。

文化芸術は、人間が人間らしく生きることの力の源です。社会へ広く波及する力を持っています。行政は応援するという立場ですが、世界的な文化芸術都市・京都の創生に向けて歩みを進められるよう、皆様の御支援、御協力をお願いいたします。

本日は、潮江館長、茂山さん、曾和さん、どうもありがとうございました。

(以上)